

第43回大会見聞記  
—紅葉の亀岡ハイツから—

宮城学院女子大学 菅谷よし子

1. 合宿形式の継続

どの学会も、その始まりは数名からなる研究会であった。仲間が集い、同じ釜の飯を食い、そして温泉にもつかりながら、本来の目的である研究報告もするという古きよき伝統

がつくりあげられていったのも不思議ではない。私が所属する家族社会学セミナーもしかし。しかし、学会と名称を変え、参加者も増えるにつれて、合宿形式は続けられなくなつた。

ここ、亀岡ハイツは静かな場所であった。黄色い落葉の先に合宿部屋がある。村落研究学会は合宿形式を守り続けている。報告会場は一つに集中させられて、分科会もない。参加者は皆同じ報告に耳を傾ける。すべての報告が全員に共有される。この合宿形式のもつメリットは大きい。しかし、若い参加者が増えれば個人主義の願望も強まる。参加者の輪を拡げながら、合宿形式を続けていくことは、今後かなりの困難を伴うのではないかと思われた。

## 2. 実証主義の伝統

報告者からは、分厚い資料が配布される。大学院の研究会さながらだ。報告時間内に説明し終えなかつた部分も、資料を読みさえすればよくわかるようになっている。

「粘っこく調査をして、しつっこく報告するんだ、この学会はな」

久しぶりにあった先輩が誇らしげに言う。

報告者が対象とする時代の幅は広く、問題関心も多岐にわたるもの、報告者の基本姿勢は、先輩の言うとおり、粘っこい実証主義であった。私自身も、フィールドに出ることを欠かした年はない。しかし、ひとりで歩ける範囲は限られている。報告を聞くたびに、日本の村落も多様なのだと改めて思った。

セッションが、一つのテーマや地域に限定された報告だけで構成されていれば、参加者は頭の整理がしやすい。現実には、ある報告から次の報告へと頭の切り替えに忙しい。しかし、詳細な事例報告に耳を傾ければ、自らのフィールドワークへのヒントがいくつも得られるのは楽しいことであった。さらには、全員参加の討論は成立しがたいとはいえ、報告のあとに、円陣でも作って自由に話し合えたらよいのだが、とも思った。

## 3. 老いも若きも

報告者は若者だけではない。ベテランというか、年長世代というか、人生の諸先輩たちも豊富な経験を身にまとつて、報告台に立つ。他の学会ではあまり見られない光景だ。定年になつても若い研究者と交流する場がある、これを学会の伝統としていきたいものである。

## 4. 国際交流への道

テーマ・セッションは環境問題であった。今後の展開が期待される分野でありながら、多少、国際的視野に欠ける点もあった。大会の基調は、日本の村落に残る伝統の強さにあるということであつて、今後必要とされるのは、それに加えて、国際的観点に立つ農村社会の分析だとの思いが消せなかつた。

しかし、それは杞憂であった。大会直前に中国・北京で開催された第6回アジア社会学会議から帰国したばかりの会員から、参加者の珍道中ぶりが話された。夜の会合は笑いの渦であった。国際交流への道はすでに確立されているのであつた。

今夏、ルーマニアのブカレストでは、また会員の珍エピソードが生まれるだろうか。IRSAへの参加についての話し合いでも、老いも若きも楽しそうに企画を出し合う。このバラエティに富んだ会員が、国際交流の場に出ていくことで、大会自体もますます楽しく、穏り豊かなものとなることであろう。